機関紙は闘う武器

組合員・家族皆が編集員

機関紙は労働組合の重要な武器です。組合の力を高める〃組織づくり〃のかなめとして組合員や家族から愛され親しまれるものでなくてはなりません。いま〃みいけ〃は一週間に一回定期に発行されていますが、数多くの組合員や家族の〃みいけ〃を支えている力、編集方針を出している執行部、直接編集や取材にあたっている編集担当者、印刷工場の人たちの努力、それらすべてに必要な経費など一回に二万部ちかく発行している〃みいけ〃には相当なエネルギーがそそがれています。しかし、編集技術の問題やそのほかいろいろな点でたくさんの不十分さが指摘できると思います。そこで現在の機関紙編集の実体と問題点を提起し、よりよい機関紙づくりのための協力を訴えます。

讀む活動が大切

〃みいけ〃は夕ブロイド四頁で週に一回定期に発行され、一回に約三〇、〇〇〇字ちかくの字がつめこまれています。

一六、五〇〇名の組合員に一枚づつ配布しているほか、記録保存用や、上部組織や他単産など外部に送付するものもふくめて一回に約二〇、〇〇〇部ちかく発行しています。一部に必要な経費は紙代、印刷費（人件費などをふくむ）で約三円五〇銭程度かかっていますから、一カ月分にするとたいへん多額な金額がかかっていることになります。それだけ多額な経費をかけていることからも、週一回の定期発行で、タブロイド四頁を二〇、〇〇〇部ちかく発行しているのは、この種の発刊物では日本中でも指折のうちにはいるほど大きなものであることを考えても、よりよい機関紙をつくらなければならないことが痛感されます。

みんなで協力を

機関紙ができるまでの大まかな過程はまず毎週、週のはじめにそのときの政治、経済のうごきや、組合のうごきなどを検討して、編集方針をだし、その方針にしたがって取材にうつります。木曜ごろまでに一応の取材をおわり、金曜から土・日曜にかけて原稿整理、印刷、発行と仕事がすすめられていくわけです。その過程で組合員や家族のみなさんからの協力がよせられます。取材記者が取材にまわったとき、いろいろなことを語ってくれるのも、組合員や家族のみなさんです。〃仲間のひろば〃によせられる組合員の声、〃姿見〃によせられる主婦の声や、部分的だが文芸作品もよせられます。また〃心のふるさと〃で紹介されている日本民謡も、決して学者や民謡研究家、音楽家の手でつづられたものでなく、三作支部の荒木さんや、本所支部の山下さんなどサークル活動のなかで身につけたたしかな立場からの民謡紹介として貴重なものです。〃仲間の本棚〃の図書紹介も、みんなで学び高まろうとする貴重な努力だと思います。

でもこれらの協力はまだ一部のかぎられた層からのもので、もっと多くの組合員や家族が、機関紙づくりに参加することと、機関紙を読む活動をおこすための具体的な配慮が必要なことはいうまでもありません。そのことが機関紙〃みいけ〃の今後の大きな課題のひとつです。

〃くろだいや〃と〃みいけ〃

〃みいけ〃は、よく会社の新聞〃くろだいや〃と比較して評価されています。〃くろだいや〃はおもしろいが〃みいけ〃はかたくておもしろくないといった声がそれです。

もちろんこのような素朴な声からも〃天才画家〃〃日本のゴッホ〃という名前で呼ばれるようになりました。何んにも知らない清は放浪を続けています。

露天風呂に飽きると花火を追って全国を歩きました。新聞社の人が来ていろいろ質問したり、沢山の人が絵を描いてくれ名前を書いてくれと頼むので、清はどうしてだろうと思いました。前より忙しくなりました。そして裸でのんびり出来るところへ向って歩きはじめました。

【十九日より太陽館】

映画

天才画家「山下清」を描いた問題作

裸の大将

【かいせつ】裸の天才画家山下清が、自ら放浪の半生をつづった「放浪日記」をもとにして水木洋子が脚本を執筆、「あすなろ物語」「琴の爪」「女殺し油地獄」の新鋭監督堀川弘通が演出するスコープ、総天然色の異色の喜劇映画です。

【ものがたり】清は、生れつき頭が悪いので八幡学園という特別の学校に入りました。学園では花や虫の絵と貼絵を夢中でやりましたありのままを丹念に描いてゆく清の絵は素晴しい出来栄えで、戦争に忙しい銃後の人たちをアッと云わせましたが、兵隊検査が近ずく年ごろになると突然、学園から姿を消してしまいました。戦争に行って死んでしまうのが怖かったからです。

ツンツルテンのゆかたに大きなリュックを背負った姿で、汽車の線路を伝って歩き廻る渡り鳥のような清の放浪生活が始まりました。やがて、怖い戦争が終り久し振りに家へ帰って、お母さんに連れられ八幡学園に行って昔のように一生懸命得意の貼絵をやりました。清の絵は再び世間の注目を浴びはじめましたが、春になるとまた渡り鳥のように放浪の旅に出ました。今度は草津や伊香保の只の露天風呂を転々と泳ぎ廻りました。東京では清の絵の展覧会が開かれて、大変な人気で連日賑わいました。

心のふるさと

前唄
〃大島小島の　間通る舟は　ヤンサノエー
北山颪で　行先殺る　ネー
おもかじ頼むよ　船頭さん
本唄
〃恋路（オシヨロ）　高島
およびもないが
せめて歌妻（ウタスツ）
磯谷まで
後唄
〃主は奥場所　わしや中場所で
別れ　別れの　風が吹く
アイヌの哀愁と風俗を伝えて踊り

〃小豆出て見りよ
浅間の山に　ヨー
今朝も三筋の　煙立つ

「江差追分」

アイヌの哀愁、北の追分

うたわれる「江差追分」は、北海道民謡の代表的なものとして「ソーラン節」とともに北の追分といわれ有名であります。

一名を「松前追分」とも呼んでいますが、江差の町はかつて〃江差の五月は江戸にない〃といわれたくらい賑やかな日本海沿岸に位する一漁場でした。

秋から冬の時候にかけて、江差の沖合いに夜釣の漁火が美しく点滅し、毎日落くほど大量の烏賊の群が水揚げされたのです。

もともと「エサシ」という語源はアイヌの言葉で昆布という意味だそうです。

この町にはいまでも昆布、スルメ類の海産物問屋が軒をならべ、ひじょうに町全体がおちついた感じを与えてくれます。

昔から本州との交易の拠点地だったといわれ、ニシンの北上にともなってさびしくとり残されてしまったのです。

「江差追分」は三百年ほど以前、伊勢路に流行した馬子唄が、そもそもの起りだといわれ、それが信州に入り「信濃追分」……

江差へ運ばれたいろいろなものが、ついで越後へでて船唄になり、ついで越後へでて船唄にもどされ、舟子の口によって江差へ運ばれたいろいろなものが江差に根付いたその唄に、いつしかアイヌの哀調が加わって今日までうたい継がれてきたのです。

この唄の特色は本唄（モトウタ）なるものがもっとも古い形式でよく一般に知られ、それに現今では「前唄」、さらに前唄の後半部を「後唄」と区別してうたわれています。

北海道地方のことを「松前」とも呼称しますが、松前藩が統治していた当時からでたもので、その中心は南端の松前および江差にあったそうです。

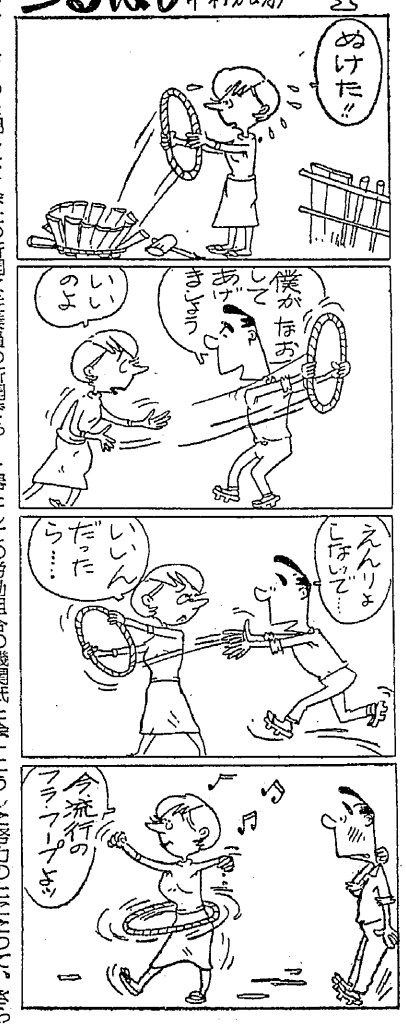
唄の文句にも北海道の地名（名所旧蹟）が数多くうたいこまれています。

北の海の「ふるさと」の山、そして海……風光明媚な日本海の汐風にのりながら、尺八の音に和す郷愁のうた「追分」には、なかなか棄てがたいものが多分にふくまれています。

私たち働らくものも北国の荒海と闘う漁民のしあわせを祈りながら「生活の歌」を南の国でもいつまでもうたい続けたいとおもいます

（やました）

ミスターつるはし　中村かめお



援助ときびしい批判

新聞つくりへ参加しよう

〃みいけ〃はゆとりがなくてかたいという声があります。それは単に肌ざわりとしてのかたさだけでなく、上から下に流す式のおしつけ的なかたさがあることを指摘しているのだと思います。

職場でのきびしい労働に堪えている組合員や、くるしい家庭の生活をささえたっている主婦の、働く者としてのいぶきに充ちた機関紙をつくる努力が必要なわけです。そのためには、いまの編集メンバーだけでは多少無理な面もあり、それを補うためにはいままで以上に組合員や家族の協力が必要で、数多くのひとびとが機関紙づくりに参加することが大切だと思います。

編集部では、職場、地域での活動家や、サークルのひとびとに呼びかけると同時に、通信員制度をもうけるなど、対策を検討していますので、その点での協力と、ひろく全般からのあたたかい援助ときびしい批判によってよい機関紙にしたいものです。

会社の新聞は従業員の新聞であり組合の新聞は労働者の新聞である本質的な相違をぬきにした、比較論は通用しないのです。

会社はつねに個人をばらばらにきりはなし、団結をさまたげようとしており、それが会社の新聞にもあらわれているのです。ここにみんなの力で前進していくための武器としての労働組合の機関紙と会社の新聞との相違があるのです。

〃みいけ〃が〃くろだいや〃の猿まねで全く同じ編集をしたとすれば、比較論としての優劣はなくなるでしょうが〃みいけ〃が組合機関紙の本質をふみはずしてそこまで「だらく」できるはずがありません。

こうした努力の上にたって、さらに立派な機関紙に高めていくためには、読む活動も重要です。例えば第五四九号（十一月二日号）では組織防衛特集号として、十三年の闘いのあしあとのあらましをまとめましたが、それによって入替採用や鉱業学校を卒業して、新しく組合員にえった仲間をかこみ話合いをし、そこで出された意見を機関紙に反映させることなどです

全国に配布される

〃みいけ〃は三鉱労組内部で読まれているだけでなく、西ドイツ全上部組織、大牟田地区はもちろん日本全国の主要な組合に送り、機関紙の交流をしています。そういう意味からも〃みいけ〃のはたす役割は大変大きなものがあります闘う武器としての機関紙づくりに積極的な協力をよせていただくようお願い、機関紙にたいする意見をよせていただくことをお願いいたします。

【編集部】

革商密柑山へ

荒尾、一斉定休を利用

全国的に商店の定休制がすすんでいるが、荒尾市では十一月十日から一斉に実施のはこびとなった。

ところがこの一斉定休にさいして荒尾地区革商連加盟店では、はじめてでもあり折角の定休日だが、おなじ革商連同志でも、店員さんなどは顔も知らない人もあり、これでは話しあうこともできなかった。それで、この日を利用して一緒に集ろうということで、河内の密柑山へレクレーションをこころみた。九割程度の人たち約百人が参加、初回としては成功のうちにレクレーションがおこなわれた。お互い話合っているうちに日ごろ知らず知らずのうちにもっていた商店間の対立もなくなり、有意義な一日だった。

なお、将来は地域分会や主婦会で運動会など行事をやる場合も、参加したらといわれている。

若い女性も寄稿

育てよう〃仲間の本棚〃

なかまの本棚（11）

〃仲間の本棚〃も十一回をむかえました。十冊の本が労働者の手によって労働者に紹介されたわけです。

〃仲間の本棚〃は、図書の内容を解説し紹介するやり方の、俗にいう書評や、図書紹介などとちがい職場の仲間、家庭の主婦が読書を通じてえた知識や感動、人間としての襟を交流しわかち合い、はげまし合って、みんなの力で高まろうとするこころみではじめられたのです。

まだ八人のひとたちが十冊の本を紹介しただけで、その書き手もかぎられたひとたちで、まだ十分にひろがっていないむきもありますが、それでもかなりの影響をよんでいます。一週間ほどの連載で、朝日新聞でさいきん図書問題をとりあげたことがありましたが、そのなかで三鉱労組の図書館と機関紙の〃仲間の本棚〃がとりあげられていました。

また市内のある書店の主人は「よく売れる本があると思ったら〃みいけ〃でとりあげた本だった」とよい本がひろく読まれることを商売根性をぬきにしてよろこんでいました。

〃仲間の本棚〃はまだ部分的にしか読まれていないかも知れないがそれなりの役割をはたしていることもたしかなようです。

はじめ組合の役員に編集部から依頼して書いてもらっていたものから、組合の若い女性の書記さんから原稿をよせていただくまでになりました。三鉱労組の組合員や家族のなかで読まれている本は相当の数にのぼり、その面から高められている組織の力も相当なものがあると思われます。

こうした多くの人々の力を〃仲間の本棚〃を通じてより一層高めていくことを望んでいます。

一千字以内で編集部まで寄稿ください。

なお、いままでの寄稿者の名前は文章の末尾に頭文字でしめしていましたが、つぎの人たちの協力をえていたものです。

(1)青年労働者の前進　境　孜（本部編集部長）
(2)左翼小児病　灰原　茂雄（本部　書記長）
(3)青年婦人論　山下　開（本部労働部長）
(4)組織網領（草案）　灰原　茂雄（本部　書記長）
(5)人生と愛について　愛と性　境　孜（本部編集部長）
(6)侵　略　蓮尾　朝男（本部厚生部長）
(7)経営学入門　広瀬　勝鮮（本部教宣部員）
(8)人生と愛について　吉賀　正澄（港務支部教宣部員）
(9)谷間の教師　江上真佐子（本部　書記）
(10)知と愛の流れ　前田　幸枝（本所支部書記）